
第1節 幾つかのドイツ統一

日本は「一民族、一国家」の国と呼ばれる。つまり、単一の民族からなる国である。これに対し、「人種のるつぼ」と形容されるアメリカ合衆国は多種多様な民族からなる移民国家である。なお、「人種のるつぼ」という表現は、同国の最大都市ニューヨーク（人口約 800 万）を指すことも少なくないが、オランダの首都アムステルダム（人口約 80 万）にはニューヨークよりも多くの人種が住んでいる。

その他のヨーロッパの国や都市でも、様々な民族が共存しており、「一民族、一国家」は、むりそ例外的である。特に、バルカン半島にあるユーゴスラビアは「七つの国境、六つの共和国、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字、一つの国家」として知られていた。しかし、1989 年に冷戦が終結すると、民族間の対立が激化し、分裂した（8 頁以下参照）。

Nation と Country

Nation と Country は共に「国」と訳される。それでは両者の違いが分からないが、前者には「民族」の意味が含まれている。つまり、単数形であれば、一民族で構成される国を、他方、複数形であれば、複数の民族で構成される国または諸民族を指す。これに対し、Country にはそのような意味は含まれていない。

なお、「国」や「国家」を表す英単語としては、その他に state がある。それと nation ないし national を組み合わせた nation-state/national state は、一つの民族で建設された国（単一民族国家、国民国家）の意である。

ヨーロッパの広い範囲を支配したローマ帝国、フランク王国、神聖ローマ帝国は、複数の民族（国家）からなる国ないし連合体であった。それらは何れも消滅・解体し、現在は、概して、民族単位で国が建設されているが、ベルギーやスイスといったように、3 つ以上の民族で構成される国もある。これは、民族性よりも、地域性（伝統的な地域的一体性）を重視した国家形態である。

一般に、一つの民族がまとまり、国を建設するという動き（民族主義）は 19 世紀後半、詳細には、ナポレオン 3 世との戦いの中で発展した。また、民族自決の原則の下で国家建設が行われたのは第 1 次世界大戦後のことである。

なお、800 年代後半にフランク王国が分裂し、ドイツ、フランス、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルクといった国々が形成されていったように、ヨーロッパ諸国の中には、かつては一つの国であったケースもある。また、それらが明確に分離・独立した後も、人々の移動は活発に行われてきたため、純粋な意味での単一民族国家は存在しない。世界帝国を築いたイギリスはさることながら、フランス、ベルギー、オランダといった国々には旧植民地であるアフリカから移り住み、移住先の国の国籍を取得している者が多数いる。近年は、イスラム圏からの移民も増えているが、これは少子化を原因とする労働力不足ないし国力衰退を補う上では、むしろ望ましいと捉えられることもある。そのため、または、人種差別に反対するヒューマニズムの観点から、ドイツでは「イスラムもドイツに属する」といった見解が主張されている。

他方、同一の民族が別々の国を建設しているケースもある。例えば、ドイツとオーストリアである。つまり、両国は共にドイツ民族の国であるが、それぞれ独立した国家である。なお、アドルフ・ヒトラー（1889～1945年）はオーストリア出身であるが、ドイツで政治的に大成し、1933年1月、ドイツの総統⁶³となった。その後、ヒトラーは母国をドイツに併合した。つまり、1938年から1945年まで、ドイツとオーストリアは合併し、一つの国となっていたが（これを「大ドイツ国」と呼んだ）、第2次世界大戦で負け、分断させられることになった。なお、オーストリアはドイツとの合併の継続を希望したが、戦勝国である連合国（英米仏ソ）によって却下されたため、独自の道を歩まざるをえなかった。

ヒトラーとは逆に、ドイツ（厳密には、ボン）で生まれたが、オーストリアの首都ウィーンに移住し、活躍した人物として、音楽家のベートーヴェン（1770～1827年）が挙げられる。

同じく音楽家のモーツァルト（1719～1787年）は、オーストリアのザルツブルクで生まれているが、この都市はかつてバイエルンに属しており、モーツァルトをオーストリア出身とすることに異論がないわけではない。

◎ 東西ドイツの分裂と統一（20世紀後半）

第2次世界大戦後、ドイツは東西に分裂したが、これも同じ民族が複数の国を建設した例にあたる。1989年12月、冷戦の終結が米ソ両首脳によって宣言されると、二つのドイツは急接近し、それからわずか10ヶ月後の1990年10月3日、ドイツ統一が実現した。なお、これは東ドイツが西ドイツに編入されるという形で達成された。

◎ 神聖ローマ帝国の発足（10世紀後半）[☞] 22頁参照

ところで、第2次世界大戦後、ドイツ、厳密には、西ドイツにはトルコから多数の労働者とその家族が移り住むようになった⁶⁴。また、21世紀、特に、2015年秋以降は、その他のイスラム諸国から非常に多くの移民が押し寄せるようになり、ドイツ社会は大きく変容した。このような社会変化の下で、ドイツないしドイツ人とは何かが問われるようになったが、その答えは一様ではない。つまり、「ドイツ観」は人によって異なるが、一般に、ドイツ人とはドイツ語を母語とする人々を指し、そのドイツ人が住む地域がドイツであると説明することができる。このドイツ地方には、中世、300を超えるドイツ人の国（諸邦）があり、それらは神聖ローマ帝国という連合組織の下でまとまっていた。ただし、オーストリアがハンガリー（そこに住むマジャール人）やボヘミア（そこに住むチェコ人）を支配していたことを通し、神聖ローマ帝国には他の民族ないし彼らの国も帰属していた。

◎ ドイツ帝国の成立（19世紀後半）

1806年、この帝国はフランスの皇帝ナポレオン1世との戦いに敗れ、解体を余儀なくされた。1世は、代々の皇帝を輩出してきたオーストリアの弱体化・孤立化を狙ったが、その陰で、ドイツ内では、プロイセンがオーストリアとの覇権争いが深まった。そして、19世紀後半、ドイツ諸邦はオーストリアを除外した上でドイツ帝国を建設した。オーストリアの締め出しは、プロイセンの対抗心だけでなく、オーストリアにはマジャール人（ハンガリー人）やチェコ人（ボヘミア人）といった異民族も住んでいたことに基づいていた。つまり、異民族を排除し、純粋なドイツ民族の国として建設されたのがドイツ帝国であり、この点において、ドイツ帝国は神聖ローマ帝国とは異なっていた。なお、1930年代、独裁者ヒトラーは「ナチス・ドイツ」を「第三帝国」と、つまり、神聖ローマ帝国、ドイツ帝国に次ぐ第三の帝国とみなしたが、実際には帝国ではなかった。

⁶³ 「総統」とは大統領と首相の両方の職を同時に務めたヒトラーの役職を指す。原語であるドイツ語の Führer には「指導者」というニュアンスがあるが、現在のドイツで、ヒトラーは「総統」ないし「指導者」としてではなく、「独裁者」とみなされることが一般的である。

⁶⁴ なお、東ドイツにはベトナムから多数の労働者が移り住むようになった。現在でも、ベルリンの一角にはベトナム人の村が存在する。

1871年に成立したドイツ帝国は以下の61の国・自由都市などで構成され、連邦制を採用していた。

- ・四つの王国（プロイセン、バイエルン、ヴュルテンベルク、ザクセン）
- ・六つの大公国（バーデン、ヘッセン、オルデンブルク、ザクセン＝ワイマル＝アイゼナハなど）
- ・五つの公国（ブラウンシュヴァイク、アンハルト、ザクセン＝コーブルク、ゴータなど）
- ・七つの侯国（リッペ、ヴァルテックなど）
- ・三つの自由都市（ハンブルク、ブレーメン、リュベック）
- ・一つの直轄州（エルザス＝ロートリンゲン⁶⁵）

連邦制の下で、各邦は従来の政治制度と法律を維持し、行政権も保持したが、プロイセンに強い権限が与えられており、プロイセンの王が皇帝と、また、プロイセンの宰相が帝国宰相となった。

このような形で（ようやく）ドイツ統一が実現したのは、19世紀末、我が国では江戸時代が終わった頃であったが、ナポレオン3世（Napoleon III 1808～1873）の存在なくしては実現しなかった。つまり、第2帝政を開始し、再びヨーロッパ各地を支配するようになったフランスとの戦争に勝利するために、ドイツ民族はプロイセンを盟主とし、団結したのである。

この戦争は普仏戦争（1870～1871）⁶⁶と呼ばれているが、「普」はプロイセンを指す。プロイセンに率いられ、勝利したドイツ諸邦は、ドイツ国内ではなく、フランスのヴェルサイユ宮殿で「ドイツ帝国」の成立を宣言した。同時にプロイセンの王であったヴィルヘルム1世（Wilhelm I 1797～1888）を初代皇帝として即位させた。

⁶⁵ エルザス＝ロートリンゲンは1870～1871年の普仏戦争で勝ち、フランスより獲得した地域である。フランス語では、アルザス＝ロレーヌと呼ばれる。第1次世界大戦で戦勝国となったフランスはこの地域を取り戻すが、1940年、ヒトラーはこの地域を再びドイツに編入した。しかし、1944年、フランスはこの地域を取り戻し、現在に至っている。

この地域はライン川沿いにあり、中心地はストラスブールである。EUの立法機関の一つである欧州議会や、国連のヨーロッパ版と目される欧州評議会の本部が設置されている。

伝統的にドイツ（または神聖ローマ帝国）との結びつきが強く、フランスの支配下に置かれたのはフランス革命後のことである。

⁶⁶ 1870年7月～1871年5月、プロイセンを中心とするドイツ諸国とフランスの間で起きた戦争を普仏戦争と呼ぶが、独仏戦争とも呼ばれる。

この戦争はスペイン王位継承問題が発端となって生じた。詳しくは、1868年9月、スペインで軍事革命（9月革命）が起き、女王イザベラ2世はフランスに亡命した。その後、プロイセン王家（ホーエンツォレルン家）の遠縁にあたるレオポルトが国王として迎えられることになったが、フランスがこれに反発した。なお、当時、フランスを治めていたのはナポレオン3世であったが、プロイセンのビスマルク宰相は、一連の工作ないし情報操作によってフランスを挑発した。その策略にひっかかったフランスが、1870年7月19日、プロイセンに宣戦布告すると、戦争が始まった。

軍備に勝るプロイセンが連戦連勝し、開戦から僅か1ヶ月半後の9月2日、ナポレオン3世はスダン（セダン）で降伏した。捕虜として捕えられた3世は廃位させられ、パリには国防政府が樹立した。新政府は戦争を続行したが、ドイツ軍の優勢は変わらず、1871年1月28日、ついにパリが陥落した。そして、翌月には、ヴェルサイユで仮の講和条約が結ばれた。正式な条約（フランクフルト講和条約）が締結されたのは、同年5月10日であったが、これにより、約10ヶ月続いた戦争は終わった。

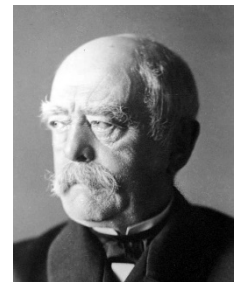
講和条約によって、敗戦国フランスはドイツに50億フランの賠償金を支払うだけでなく、アルザス＝ロレーヌの大部分をドイツに与えることになった。

ヴィルヘルム 1 世と同じ時代に生きた他のドイツ王としては、「白鳥城」(Neuschwanstein 写真右)を建立したことで知られる、バイエルンのルートヴィヒ 2 世 (Ludwig II 1845~1886) がいる。この南ドイツの王家からは、現在でも「シシー」という愛称で慕われている、エリザベート (1837~1898) が出ているが、彼女はルートヴィヒ 2 世の従妹である。なお、シシーはオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世 (Franz Josef I 1836~1916) の妃となり、オーストリア・ハンガリー帝国 (1867~1918) の成立に尽力した。このように、オーストリアがハンガリーと手を結んだのは、ドイツ諸邦との戦争 (1867 年の普墺戦争) に敗れ、国力が衰えたためであるが、異民族の国であるハンガリーと、いわば「結婚」したため、血統を重んじるドイツ諸邦からは疎んじられるようになった。そのため、1971 年に結成されたドイツ帝国の一員になれなかったが (前頁参照)、第 1 次世界大戦で敗れて「二重帝国」が崩壊し、ドイツ人国家に戻ったオーストリアは、それから約 15 年後、ヒトラーによってドイツに併合された (前述参照)。



なお、プロイセンでは秩序や勤勉が重んじられ、人々は規則正しく、かつ、精励であったとされる。そのため、我が国は「東洋のプロイセン」と呼ばれることもあるが、両者には深いつながりがある。詳細には、明治維新期の日本は、当初、フランスから「ナポレオン法典」を「輸入」しようとしたが、普仏戦争でプロイセンが勝利したことを受けて方向転換し、森鷗外を初めとする官僚がドイツに派遣されるようになった。日本民法がフランス法的な性格とドイツ法的な性格の両方を持っているのは、そのためである。

ところで、プロイセンが推進力となって実現した、19 世紀後半のドイツ統一は、ビスマルク (Bismarck 1815~1898 写真右) の存在なくして語れない。彼は初代皇帝ヴィルヘルム 1 世の治世下でプロイセンの首相となり、国威発揚や富国強兵に大きく貢献した。すでに述べたように、ドイツ諸邦は 1867 年の普墺戦争でオーストリアに勝利し、オーストリアの弱体化に成功したが、これもビスマルクの策略によるものであった。また、約 3 年後に勃発した普仏戦争でドイツ諸邦が勝利を収めるのも、彼の功績によるところが大きい。ドイツ統一は鉄と血、すなわち、兵器と兵力によってのみ実現されると述べたことから、ビスマルクは「鉄血宰相」の異名で知られているが、内政面では、新しく発足したドイツ帝国の治安を維持するため、反対勢力や社会主義運動⁶⁷を徹底して封じ込める一方、世界で初めて社会保険制度を導入した。



ヴィルヘルム 1 世が 91 歳まで生き長らえたこともあり、その跡を継いだ長子のフリードリッヒ 3 世 (Friedrich III 1831~1888) は、即位後、わずか 99 日で死去した。そして、彼の長子が第 3 代皇帝ヴィルヘルム 2 世 (Wilhelm II 1859~1941 春学期のテキスト 35 頁) となった。29 歳で即位した、若き新皇帝は祖父の時代の「鉄血宰相」を退陣に追いやり、新しい政治を開始したが、彼の自由主義的な政策は外交官の経歴を持つオイレンブルク (Eulenburg 1815~1881) の思想によるところが大きかった。伯爵家出身のオイレンブルクは、プロイセンの外交官としてバイエルンに派遣され、ルートヴィヒ 2 世に謁見したこともあった。また、1861 年には江戸幕府と通商協定を締結している。

オイレンブルクの勤めもあり、ヴィルヘルム 2 世はフランスとの和解を考えるようになった。普仏戦争で獲得した領土 (エルザス=ロートリンゲン、前頁の注 65 参照) を返還する案まで持ち上がったが、それは当時のドイツにとってスキャンダラスなことであった。そのため、軍部の反対にあい、和平構想は闇に葬られた。また、オイレンブルクは私生活 (同性愛者であり、皇帝とも関係を持っていたとされる) を暴露され、政界から姿を消したが、彼の失墜を目論み、陰で動いていたのは、祖父の時代の鉄血宰相ビスマルクであった。

⁶⁷ この時代、ドイツ国内では、カール=マルクス (1818~1883 年) が提唱する社会主義運動が勢いを増していた。

平和の推進役を失ったドイツは軍備拡張に傾倒し、第1次世界大戦に突入していったが、この戦争で敗れ、帝政は崩壊した。最後の皇帝（ラストエンペラー）となったヴィルヘルム2世はオランダに亡命し、第2次世界大戦中の1941年に死亡するまで、二度と祖国の地を踏むことはなかった⁶⁸。

戦後、ドイツ帝国は、世界に先駆け、社会的権利を保障した「ワイマール憲法」で知られるワイマール共和国に変わった⁶⁹。また、普仏戦争で獲得した領土はフランスに奪い返されるだけでなく、ドイツの領土の一部（ザールラント）がフランスの影響下に置かれることになった（形式的には、第1次世界大戦後に設立された国際連盟の管理下に置かれた）。なお、後に、この地域の住民はドイツ復帰を住民投票で決め、ヒトラー政権下で復帰が実現した。しかし、ほどなくして始まった第2次世界大戦でドイツは敗れ、この地域は再びフランスの支配下に置かれることになった。ところが、再度、住民投票を行い、ドイツ復帰を果たした。

このように、比較的短期間の内に帰属先が度々変わったのは、この地域が石炭の産地であり、それを利用した鉄鋼業が栄えていたためである。第2次世界大戦後の1952年、独仏両国は、平和の実現には石炭と鉄鋼を共同管理下に置くことが重要であると認識し、欧州石炭・鉄鋼共同体（☞75頁参照）を設立したが、ザールラントのドイツ復帰は、このようにしてできた新しいヨーロッパ秩序の枠内で実現した。なお、同共同体、設立から50年後に消滅し、EC（European Community 欧州共同体）に承継された。2009年12月には、ECも消滅し、EU（European Union 欧州連合）に引き継がれ、現在に至っている。

☞ ザール問題について、春学期のテキスト54～55頁を参照すること

⁶⁸ なお、ヴィルヘルム2世がドイツ国内に残した城や財産はすべて没収された。近年、彼の子孫がその返還を求めるようになり、ドイツ国内で物議を醸している。

⁶⁹ ワイマール（Weimar）はドイツ中部にある都市であるが、ドイツ語ではヴァイマールと発音される。東西ドイツ分裂時は、東ドイツの領土内にあった。

ワイマールは、1572～1809年はザクセン＝ワイマール公国の、また、1815～1918年はザクセン＝ワイマール＝アイゼナハ大公国の首都となった。18世紀末から19世紀初頭、ザクセン＝ワイマール公のカール・アウグストは文人を厚遇したため、ゲーテやシラー等が集まり、ドイツ文学の聖地となった。また、1919年8月に制定されたドイツ憲法は、この都市にある劇場で制定されたため、「ワイマール憲法」と呼ばれる。同憲法は第2次世界大戦でドイツが敗れるまで施行されたが、1934年8月、ヒトラーが首相と大統領を兼ねる地位を得ると、空文化し、ワイマール共和国体制は崩壊した。なお、ヒトラー政権下の1937年、ワイマールには強制収容所が設置された。第2次世界大戦後は、バウハウス（Bauhaus）の発祥地となった。